

ゼロ初級クラスで「読む」力も育てたい！

—読解を支える準備活動—

丸山 多賀子 (兵庫県立芦屋国際中等教育学校)

1. 本稿の目的

ここでは、中学一年生のゼロ初級者を対象に行った「読む体験」の開始時期及び内容について報告する。また、その活動を多方面から支えた工夫を紹介する。

2. 実践の場の紹介

実践校は、六年間一貫の中等教育学校である。定員の約8割が外国にルーツを持つ生徒及び外国での生活経験がある生徒である。新入生を対象に3月末にプレイメントテストを行い、少人数クラスでの日本語支援が必要かどうかを判断する。日本語クラスに入ることが決まると、数学・理科・社会でも少人数クラスで学ぶことになる。第一言語での通訳及び翻訳の支援も年間を通して様々な場面で(授業だけでなくホームルームや校外学習)行われる。

特別な支援が行なわれるのは二年生までで、国語はもちろん、全ての教科で普通クラスに合流する。従って、日本語クラスの教員にとっては、三年生までに「自分で学習するストラテジーを身に付けた生徒」に育てるために、日本語の面から支援を行うことが大きな目標である。

3. ゼロ初級クラスでの実践

3. 1. カリキュラムの作成

筆者が、ゼロ初級クラスを担当したときのことである。生徒(生徒A)は来日三か月で、ひらがなとカタカナは書けるが、あいさつ程度の日本語しか話せなかった。しかし、母語では読書が好きなだけでなく、詩を書いたり小説を書いたりしていた。また言語を学ぶことにも積極的な姿勢を持っているとわかり、元々持っている「ことばの力」を日本語の学

習にも転移させたいと考え、カリキュラムを組む際、次の2点を柱として考えた。

1) 読む体験を通して語彙や表現を広げ、深めていくスピードを速めること。

2) 読む授業を行うために、話す力・聞く力を徹底的に鍛えておくこと。

3. 2. 帯活動の重要性

授業は一対一で、週に4回ある。数字やあいさつなどのサバイバル日本語から始め、並行してリズム練習を4月から帯活動として続けた。あいさつや数字、行事の名前(校外学習や文化祭、プール掃除など)も取り入れ、リズム練習した。生徒Aは最初は手と口がばらばらで難しい様子だったが、6月ごろにはリズムを意識しながら、教師の発話を自然にリピートすることができた。カリキュラムの柱として考えた「話す力」の前段階としては効果的だったと思われる。

年少者の場合、授業中に音読をしたり日番として大勢を相手に話す機会も多いので、早い段階で発音練習を入れていくべきだと考える。ただし、フィードバックしすぎると発話する気がなくなる。どこを直すのか、何から教えるのかを生徒の母語などを考慮した上でシラバスを作成し、楽しみながら参加できる環境を心がける必要がある。

また、二つ目の帯活動として、ディクテーションを行った。カタカナ語やカタカナとひらがなが混ざった単語から徐々に文単位に広げた。書かせることで、音声的なエラーと表記ミスが結びついてしまうことを回避できる。ディクテーションに使う文には学習した文型や漢字プリントの語彙はもちろんのこと、他教科で学習中のキーワードやクラスでの出来

事をタイミングよく取り入れることで、文が長くなっても予測して書くようになった。間違ふこともあるが、この「予測してとにかく書いてみる」という姿勢は、自律学習において必要な力ではないかと考える。また、帯活動として続けることで、音を一つ一つ聞き取って書くのではなく、単語や句といった大きなかたまりで聞くことに慣れていった。これは、授業中に板書を写す際にも必要だが、「読む体験」をするためにも重要な力である。

3. 3. 「読む体験」を取り入れる

どの教材を読んでいくのかについて考えた時、日本語教育用の読解教材は語彙コントロールされているため、国語の教科書とのレベル差が気になった。また、中学校の国語の教科書は、語彙や作品のタイプなどの観点からも小学校の国語の教科書がベースになっていると思われる。そこで、中学校の教科書との差が小さくなるように、初級前半のテ形文型が終わったころから、小学校の教科書に掲載されている作品を授業に取り入れた。その際、文型を復習するために読むのではなく、作品として読む体験を積んでいくことが重要だと考え、次のような活動を「読む体験」として設定した。

- 1) 題名を考える。
- 2) 物語の後半を推測する。
- 3) 挿絵や表紙絵から内容を想像する。
- 4) 次の展開を予測する。
- 5) 書かれている文を絵で表現する。
- 6) 登場人物の関係を図でまとめる。
- 7) 再話する。
- 8) テキストの内容を体験する。

これらの活動を行うための準備として次のような工夫をした。

①漢字のプリントを宿題として出したが、日本語教育用教材と小学生用漢字教材を総合して作成した。その際、使用文脈を中学生レベルに上げ、語彙や読みを追加した。例えば、「百」という漢字も、漢字自体は易しいが、

「百発百中」という語彙に広げて意味を推測させたり調べさせたりした。

②シャドーイングや音読教材として絵本を使用した。絵が話の展開を的確に表しているような絵本の場合、自分で内容をある程度理解できる。理解した上でシャドーイングを行うことで言語形式の方に注意が向くと考えた。

これらの工夫を続けることで、読解のために必要なスキルをボトムアップとトップダウンの両面からサポートできたと考える。そこで各活動に適した教材を選び、「読む体験」を生徒と協働で行った。

4. まとめ

少人数クラスでは、生徒の「できること」と「できないこと」を見つけ、それをいかにカリキュラムに反映させていくかが問われる。ゼロ初級者の場合、「できないこと」への対応が急がれ、文型シラバス一辺倒になりがちである。しかし、それだけでは長い日本語学習の道りを自分で歩んではいけない。初級の段階から積極的に読解活動を取り入れることで、高いモチベーションを維持し、様々な場面や文脈に対応できる能力をも育てることができると考える。

生徒Aには、冬季課題図書として『銀河鉄道の夜』を指定した。長編にも関わらず、登場人物に線を引いたり、わからない単語を丸で囲んだりしながら、ざっと目を通し、あらすじと感想文を書いてきた。また、図書館で本を借りて読む姿を三学期になって目にするようになった。その成果は、授業中の言葉の言い換え練習や意味説明の際にはっきり現われている。

.....

謝辞

本稿をまとめるにあたり、矢元貴美先生を始め、筒井美貴先生、元村尚美先生には有益なご助言をいただきました。ここに記し、感謝を申し上げます。